

はじめに

くらしや文化、環境とともに進化した和建築

みなさんの住んでいる家、通っている学校、買い物に行く店、本を借りる図書館、川を渡る橋など、これらはすべて建築物です。この本では、日本の古くからの技術やつくり（様式・スタイル）を受けつぐ和建築について見ていこうと思います。

古代から、身の回りにあるものをつかって家は建てられてきました。日本は森林が多いので、縄文時代から植物がおもな原料としてつかわれてきています。そして、くらしや文化、環境に合わせて、よりくらしやすいように、安全に快適に過ごせるようにと進化していきました。大陸からの技術を吸収したり、国内で目的に応じて技術をみがいたりしながら、和建築は受けつがれてきたのです。

また、建築物が集まることで生まれる景観があります。日本各地に保存地区があり、いまでもむかしの町並みを見ることができます。国内外から観光客が集まり、和建築の美しさ、日本らしいくらし方が注目されています。

一方、地震大国といわれる日本ならではの、高い耐震・免震技術がつつかわれてきたことも忘れてはいけません。歴史的建造物に対する補修もおこなわれています。

この本では、和建築の種類や歴史、技など、さまざまな角度から和建築を紹介しています。知れば知るほど日本文化の奥深さを感じ、和建築のすばらしさがわかってくることでしょう。



▲『東海道五拾三次 鳴海 名物有松絞』（1834 年ごろ）歌川広重 画
江戸時代に東海道の土産としてつくられた木綿の布「有松しぼり」で栄えた有松の町並みがえがられています。



▲現在の有松の町並み
当時の面影を残し、国の重要伝統的建造物群保存地区になっています。

もくじ

和建築の世界へようこそ・・・・・・4

世界にほこる和建築・・・・・・・・・・4

各地の和建築を見てみよう・・・・・・・・6

和建築の技を見てみよう・・・・・・10

神社や寺をつくる宮大工のスゴ技・・・・・・・・10

家づくりのスゴ技・・・・・・・・14

現代の大規模木造建築・・・・・・・・16

日本の家のいろいろなかたち・・・・・・18

屋根とかべいろいろ・・・・・・・・18

住む人・時代による家・・・・・・・・20

修復・再建で長く生きる和建築・・・・・・22

クイズで楽しむ和建築！・・・・・・24

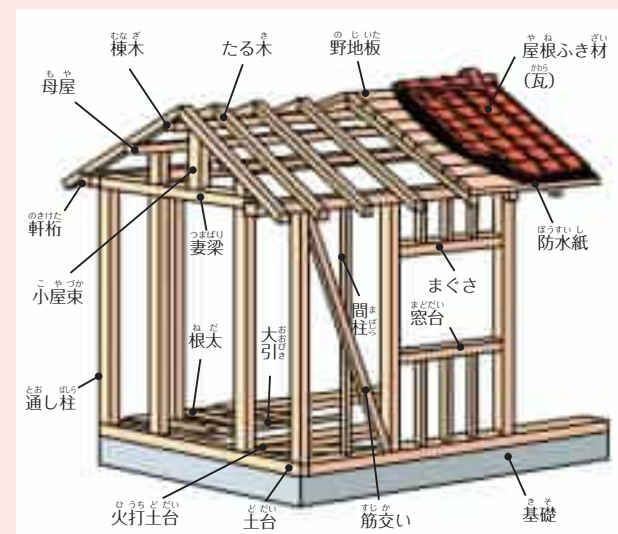
もっと和建築を知ろう・・・・・・26

和建築の歴史・・・・・・・・26

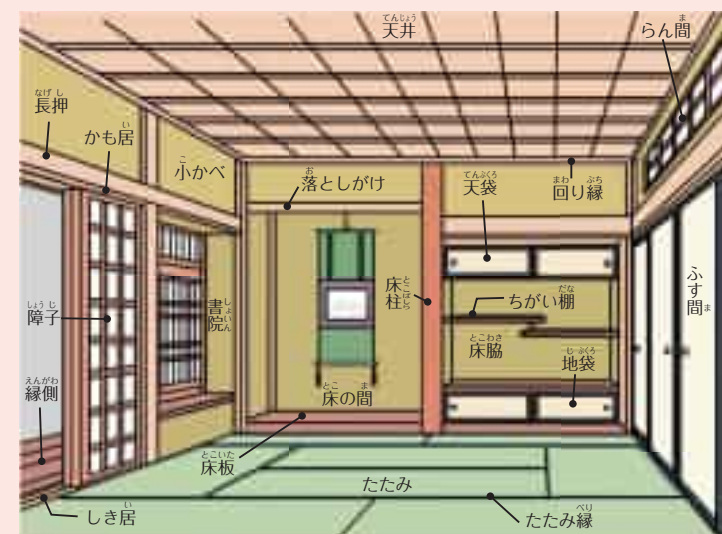
歴史的建造物の継承・・・・・・・・30

環境と人にやさしい建築・・・・・・・・30

和建築にかかわる仕事をするには・・・・・・・・31



▲在来軸組工法の部材の名前



▲書院づくりの部分の名前

和建築の技を見てみよう

神社や寺をつくる 宮大工のスゴ技

昔ながらの建築の技法を受けつぎ、神社や寺を建てたり、いたんだ古い建物を修復したりするのが「宮大工」です。1400年以上の歴史をもつ「金剛組」の技を見ていきましょう。



姿勢を決めて、同じ力加減で
息を止めて一気にひきます

▲カンナ（鉋）という道具で材木の表面をけずっているところです。けずる厚さは刃の位置で調整。職人技で、すて見えるほどにうすくけずることも。けずった表面は、みがいたようにツルツルになります。

【神社・寺ができるまで】

1. 設計図案をつくり、大きさや間取りなどを決める
2. 100分の1（または50分の1）の平面図（縮小図面）をつくる
3. 同サイズで実施設計図をつくる
4. 細かい見積りをして契約
5. 各種材料や人員の手配
材木の調達、木割（原木のどの部分をどこにつかうのかを決める）などをして、だいたい大きさの製材を依頼。
6. 地縄張りをして、設計の最終確認
※敷地に縄などで建物の位置を表すこと
7. 基礎・土台工事
8. 屋根などの曲線部分の現寸の設計図（現寸図）をつくる
9. 必要部分の現寸の型板をつくり、材料を切り出す
10. 柱や梁などの骨組みをつくる小屋組みをして、屋根の下地をはる
11. 瓦や銅板などの、屋根材をふく専門職に依頼
12. 窓やとびらなどの開口部をつくってからかべをつくる
13. 内装・外装を仕上げる
専門職も入り、共同しておこなう

完成！

6の地縄張りから、
だいたい13か月

神社や寺は修復しながら長くつかわれる

木造建築は、石やれんがなどの建物にくらべると、燃えたりくさったりしやすいので、長い時間残りにくいものです。しかし日本では、1000年以上の歴史をもつ木造の建物がいくつもあります。これは、つくるときに将来修復しながら長くつかうことを前提に考えられているからでもあります。実際の修復については22ページを見てください。

材木選び

建物のどの部分にどんな材木をどういう向きでつかうのか決めるのは、とても大切な作業です。経験を重ねた職人だからこそ、木の性質を知り、強度や見た目、価格などさまざまな視点から選びます。金剛組は大阪府と埼玉県に加工センターをもち、1階に1つの建物分の材木が集められます。2階には現寸図をかきおこす「現寸場」があります。

（右写真は埼玉県の加工センター）

木を知りつくした
匠の仕事！



縮小図面から現寸図へ



設計士がつくった縮小図面は、正面や側面、横や縦の断面図に分けられ、数十枚えががれます。これらから、広い現寸場で、建物の実際の大きさの現寸図をかきおこします。縮小図では得られない、なめの断面図や、実際の曲線を決定するなど、とても重要な作業です。

曲線があるから、
宮大工の仕事は
むずかしい！



縮小図面をもとに、現寸の図面を板の上にかいているところ。曲線は、曲がる位置や割合を計算して目安を決め、細い角材をくぎで固定して鉛筆などでかきます。



型板づくり

広〜〜い
現寸場



現寸図をもとに、うすい板やフィルムシートで型板をつくります。型板は、材木を正確なサイズに切るためにつかうので、どの部分の材料になり、どこと合わせるのかなど、正確に写し取らなければなりません。



やきものの種類と見方

やきものは、さまざまな分け方があります。産地による種類の例は4～7ページで紹介したので、そのほかの分け方を見ていきましょう。

【陶器と磁器】

原料と焼く温度によって種類が分かります。現在おもにつくられているのは陶器と磁器です。どのようなちがいがあるのか、見ていきます。

素材

原料は土で、陶土とも呼ばれます。水を加えてどろ状にして乾かし、練ってねん土にしたもので、かたちをつくります。地(素地)の色は土の成分や焼き方により、茶色や黄色、黒系などの色になります。



益子焼の大誠窯の土置き場と練ったねん土。

焼き方

1000～1300度で焼き上げます。このうち鉄の多い陶土をつかい、700～800度で焼くと土器(縄文土器や弥生土器など)、1200～1300度でかたく焼き締めたものを炆器(備前焼など)と呼びわけることもあります。

模様

おらかな模様がが多く、素朴な民芸調のデザインが特徴です。うわぐすり(釉薬)をかける場合が多く、表面がつややかになりますが、ぼったりとした素材感が感じられる仕上がりになります。

例

益子焼、唐津焼、織部焼、萩焼など。

「土もの」といわれる
日本古来のやきもの

陶器



<器の部位の名前>

器には、部分ごとに名前があります。知っておくと器の説明をしたり、聞いたりするときに便利です。茶道の茶わんの場合、糸底はたたみにつく部分のため「たたみ付」とも呼びます。



磁器

17世紀に日本に伝わった
「石もの」といわれる
やきもの



素材

石英粗面岩という石が磁器のおもな原料になり、白磁鉱や陶石と呼ばれます。これを細かくくだき、多くはねん土と混ぜてつかいます。焼くと白くなりますが、青や赤みがかった白などバリエーションがあります。



有田焼につかわれてきた伊賀山磁石場と、有田焼のねん土。

焼き方

1300～1400度で、陶器より高い温度で焼くのが特徴です。陶器にくらべてガラス質が多く、なめらかで、かたく、軽く仕上がります。

模様

繊細な模様をえがくことができます。地が白いので鮮やかな色が映え、写実的な表現も可能です。青の濃淡だけでえがいたものを「染付」といい、陶器でも磁器でも用いられますが、地の白さと青のコントラストがより映えるのは磁器のほうといわれます。

例

有田焼、九谷焼など。

染め織りの世界へようこそ

各地の伝統の 染め織り

日本には、伝統的な染め織りの種類がとても豊富にあります。そのうち、経済産業大臣指定伝統的工芸品に認定された染め織りを紹介します。

※地図に示している情報は 2023 年現在のものです。赤色の工芸品は写真で紹介していますが、緑色の工芸品は名称だけの紹介です。

①首里織

琉球王府の中心地であった首里でつくられてきた織りもので、おもに王府用であったため、格調が高く、高品質なのが特徴的です。種類は豊富で、首里緋、首里花織、首里花倉織、首里道頓織、首里ミンサーなどがあります。



首里緋
琉球王府時代につかわれた
絣織物の発注用の「御絵
図」にえがかれていたデザ
イン画を元に復元したもの
です。

(安座間美佐子 作)



首里花織
浮織ともいわれ、よこ糸を浮かして模様を表現しています。



首里道頓織
両面つかうことができるのが特徴です。

②琉球びんがた

沖縄を代表する伝統的な染めものです。一般的に布を染めるのには染料をつかいますが、沖縄では顔料をつかうことで、強い太陽の光に負けない鮮やかさを保ちます。またアイ（藍）で染める藍型もあります。



沖縄県

- ・首里織①
- ・琉球絣
- ・南風原花織
- ・読谷山花織
- ・読谷山ミンサー
- ・知花花織
- ・喜如嘉の芭蕉布
- ・久米島紬
- ・宮古上布
- ・八重山ミンサー
- ・八重山上布
- ・与那国織
- ・琉球びんがた②



どろ染めにより、丈夫で美しい布になります。

③本場大島紬

鹿児島県の奄美大島でつくられてきた絹織りものです。ごく細かいかすり模様が特徴で、糸をかすり染めするときに専用の締機をつかいます。また、どろをつかったどろ染めによる光沢のある黒色は格別です。



京都府

- ・西陣織⑥
- ・京鹿の子絞
- ・京友禅
- ・京小紋⑦
- ・京黒紋付染

鳥取県

- ・弓浜絣⑤

福岡県

- ・博多織④
- ・久留米絣

鹿児島県

- ・本場大島紬③

徳島県

- ・阿波正藍しじら織

新潟県

- ・小千谷紬⑬
- ・小千谷紬⑭
- ・塩沢紬
- ・本塩沢
- ・十日町絣
- ・十日町明石ちぢみ

山形県/新潟県

- ・羽越しな布

北海道

- ・二風谷アットウシ⑮

山形県

- ・置賜紬

福島県

- ・奥会津昭和からむし織

群馬県

- ・伊勢崎絣
- ・桐生織

茨城県/栃木県

- ・結城紬⑫

埼玉県

- ・秩父銘仙⑪

東京都

- ・東京染小紋
- ・東京手描友禅
- ・東京無地染
- ・本場黄八丈⑩
- ・村山大島紬
- ・多摩織

愛知県

- ・有松・鳴海絞⑧
- ・名古屋友禅
- ・名古屋黒紋付染

大阪府

- ・浪華本染め

長野県

- ・信州紬

④博多織

織りによる模様は、よこ糸で表現するのが多いのですが、博多織ではたて糸で表現します。しっかりと織りこまれた生地は帯として締めやすいと評判ですが、最近では着物地としてもつくられています。



⑦京小紋

京都で発展した型染めです。いまま伝統的な技法を用い、和紙を重ねた型紙をつかい、米ぬかのりを混ぜた染料をつかうなどして、おもに絹地を染めます。

